

白外行報
大屋



15
5



18
15
5

内外新報第四十一號

慶應四年五月十九日



○督府 脚沙汰書伊豆守殿出液

至日以奉族个未々公得遠々々々
意不有持戴主人□□恭頌々々
以々後走々及以之野山内不々々
一民財を掠奪し蓋先暴を逞し友軍に抗闘す實は不
了殺し国滅び不々得公今被誅伐は 仰出々此後
為公得可未達々 大総督官 脚沙汰少中

五月

○五月十五日之晝山内焼失し場不

山王清供所

山王社清水堂大仏殿穴稻荷等残り

吉祥園 俗山門といふ

瑠璃殿 俗中堂といふ

御水屋ハ残る且 神祖御灵屋ハ内別糸等々

御本坊

御門并ニ内築地ハ残る御殿向不残焼失

凌雲院残らず 涼泉院七か

光王院残らず 妙教院七か

光成院等々

根岸片隠殿 御門長屋残る片殿向不残焼失

此外未多分ず

同不迫辺町家焼失し分

仲町多例同片側町廿二條を以て焼失し場を

廣小浜西側焼失し同東側等々

致害屋町残らず

同册町同形

上野町式丁目同形同き丁目少く

山下迄がんあぐ里村五条天神焼る

市徒士町少く

下谷町同形 沙原新吉町同形

坂本寺丁目式丁目残らず三丁目少く

谷中門外町屋跡らふ三橋所より團子坂下死く焼く

天皇古本堂并子中門前所根津も少く焼く

山内并子近道子有之に死骸所山内四十八九人三橋内

四人廣小路三人其外谷中口死亡とも都合七拾余人

焼死し未数不知

十五日初五ツ時おの戦争お始セツ時迄終る共八燧

に夜半以迄残り火燧十六日昼迄と有く

昨十四日之野屯集し者も追討をくその命 大惣督

府より各藩隊長中へ下りし一日夕刻をえ付橋

くメ切り下谷辺ハワふまおらハ十筋遠市門外廻市中

に果く立退り申さぬ所は徳町と老を援け勿成

智く乃海に逃すもひもその陸續もつかひ多し

其外流石具を運中強動ひしうあす十日早朝

より友軍市人数繰りし谷中廣小路あり及口子碓茅町

林原屋敷に大砲をかゆえ打おせし同致難れ

川原丸多くハ不忌の湖水に落款あり少くかす中

以し打也外双口へお廻り川内上野方ハ橋し俗

其害消除天下を蒙り安んず又無位也民と
一々早く安堵し思ひ成りて久く多し不承ハ撰
離散する事何れも加へて篤く 所執意成体認奉り
未くも去といふ多し聊か遠き旅此を安堵い
多し各生業を管し其外又安んずる也

五月

昭十五日より三日の旨迄海濱に於て一切是止
の事

五月十四日

大総督府参謀

昭十五日より三日の旨宿禰人夫等立てて一切是止
の事

五月十四日

大総督府参謀

過日以來脱走の輩は山内山外不々屯集屢官兵を
晴殺し或は安軍を偽り民財を掠奪し益々果敢逞
多し奈実ハ国家に乱賊多し已来右様と者を見付次
身速に打取らる多し若し一密に扶助ハ多し或は隠
る者多しハ賊徒同輩多しハ者也

五月

○

翌十六日朝王子辺より我事有りし由

官軍由人殺江戸市中井より近立不く見まかり残兵殺し

し冷後由台捕よお成る者もききし

同夜赤坂迄火有りし

大徳督府し印鑑又と田安一橋殿の印鑑亦持まきと

由門と通り不叶し

内外新報第四十二號

慶應四年五月十九日

○

越後新發田^{シバタ}老侯は月中國件へ集られしに越後六日

市又新國を建會藩の富士押留めあり日洋を所とし

其侯の儀に侯を替めしよあはれ月勢の中又官軍

交り居し其の意念より出し夕の由此國は改め

よりお人殺りし新發田を送りし其後侯に侯集り

以節由會澤入に長沼宿勢を代り等の関門を殺

しく改め百人伴の供人又一枚づり懸れを返せり此

札と以て金津城下を通り新豊田原場赤谷に圍ふ
て籠れを度し新豊田へ着せり世不又塚槍と云櫓
に
也と云

但新豊田原の素より金津とい舊齒の交りり此
藩は一切通行せざるよし

○同日月廿七日出概倉よりの來帖

去る廿八日薩長大垣の兵白門表へ襲ひ來り街を第
九山ありび又黒門に以て我軍を襲ひり掛曉までお始
め不の討たるの戦會を勝利し中より炮声滿地へきこ
へと云りしに之隊繰出し又相成り金津勢もど内陣せ

ざる中に付大砲二門人殺百五拾人むどりと白門へ出
陣し孰に西谷に足介所分城にケおん守をせし中
然るに官軍近境に花集し倉をとり襲來りし即の振不
お見へ概倉と云と奥あり要路に防備しと別て心配
の中に西谷に

○奥妙某藩士の吐し

一醍醐殿が宮邊より裝束を戎服に改められ四十人
の兵隊に引度しの変退を落失せ後口お人にて
福徳城へ逃退しお成りす一或る説は福徳門に
て俄人の不討討はしかの噂あり



長藩 世良備藏

同附 日 勝又善右衛門

右由人福富市中に討死に成りしもの事

日 松本 某少年

世良に附屬し討死の事

日 野村十郎

福富入口林に討死の事

日 同家本某

福富長樂寺に逃れし事城内に討死

日 中村小次郎

淡川と新町との間に戦没の事

日 大山格之助

同月廿八日討死の事

参謀附 仙藩 栗原五郎

白川表より野村氏より討死の事

一 仙臺勢に数百人従ひ月廿七日討死し白川に練兵舎

を設け小隊福富へ進出し討死

一 仙臺中合戦討死し榎板大又復し薩長の徒に討

死す所の風聞あり

一 世帯南に津屋の西藩に討死すもの事

来りて其執難毎承致せしをんか

一 奥羽の列藩十合せ令津附罷りて其に付云春弘おと儀
倫玉高のりし多ふて此倫よりゆし下然まともを儀
倫を以て外漢さる事に付相分らば

一 安成勢五月五日白之橋人後白門口へ出張の事

一 相馬勢先登り郡山まぐり百人後繰出しの事

一 館林秋元侯の陣を羽勢天童に有るに交行方より鎮
撫相成の陣を引掛ひ上下十七人隊引連き諸方具
為通し人足はく白門へ通り戦事申継之方是かへ以
て付築城平へかへ五月朔日湯本宿へ泊り

○白石會儀列藩誓書

此度仙臺白石におわく列藩會儀公平正大を以て
朝廷と違背し生害致極恤し 皇國を維持せんと欲を
仍て誓約する左のごとし

一 強を恃^ツ弱を侮^ラす或は地^ノの危急を傍觀する者有る

一 おわくの列藩^ヨ誓書に違背を加ふる事

一 取と據へ利と氣と機密を洩^スし同盟と離間する者
有るにわづか^ニ継責を加ふる事

一 妄りに人馬を勞し細民の艱苦を顧みざる者有るは
於ていづか^ニ継責す

右事件ハ列藩抗議を盡し公平に決らざる軍事の機
會細微に節目又至り少くハ抗議及たは大國の号
令に随ふ事

一 全軍を殺戮し令教を掠奪するの類想と名分を侵す
者有るといふを速に教刑に處せざる事

但列藩歎然といひ曰く新聞亦曰緝捕等事 中外新聞亦
三十三号又及らる故に累して載せし但追々駢
付者會後又加するハ諸藩重臣の姓名の之を記し
て其遺漏を補ふ

羽州新庄

戸沢中勢大柳家来

奥州磐城平

安藤理之助家来

日向泉

本多社登与家来

羽州新庄

石井武左衛門
六郷兵庫家来

奥州福島

六郷大学
板倉半斐与家来

羽州浪田

池田権左衛門
岩城右京与家来

三十一

大平洋信

奥州湯長屋

内蔵長泰丸家来

系系 架

同州下子渡

立花出雲与家来

系丸介記

同州系沢新田

上杉後河与家来

江口復翁

内外新報第四十三號

慶應四年五月二十一日

○五月九日修夏与致函返し

股部筑前与海陸軍附病院之活用此扱以与之故の为り
お望し以之

○同十六日此日人法返し

別紙と通之

大熱督府上之旨 係出以以付吏、お望し以へども
於心故の为り法旗本此家人中へ之旨お望し以事

五月

徳川亀之助

其方旗本撒兵隊別々組其外屯集之者先之者分之者毎
其家歸也

治村以条其後之申進以事

○月十八日之奉行大目付沙汰事其以并沙汰

付へ得る事致仕候し

府内制札子之九除以振

大總督官 沙汰治以小事

五月

右之通り候 治出以事早之九除以申 致仕する事

小事

○

上様沙汰名

家達様と申候以名沙汰旗本由家人中へ下知進以事

○

去る十日日上野山内彰義隊其外屯集之者ども

官兵沙汰向お成以在令く

前上様沙汰意とお有き候之粗暴之取柄又あり候以者

由之れあり以以付沙汰追討有之由候以之沙汰又沙汰会

有之由候又之候以付沙汰追討有之由候以之沙汰又沙汰会

意格におきて私に屯集しつゝ、務立に振て裁決し、之に
是乃後若遠きものいゝを度中付に以て承りしれはるる
くひ

右に執事旗本清家人中渡是ざる振てお福に

○月十九日市内人出候し

浴姫若孫清事加州表にあらして清石房之妻清養生ふ
為叶去る三日清逝去を振て此後清旗本清家人中へ
此其ひ多

○月廿日

林 大学頭

若分江戸法基に是をい有

大總督官に 出出に以て清及 清免に成に

○

酒井安房守

佐久間鏞五郎

石川河内守

門文言勤仕並に命即日石川佐久間の大目付とよ余
酒井の學問に清用を扱と命多

○薩州より清届の事

共士

湯地治太事

有吉庄と巫

有馬早八郎

右の付張の者どもは、はるばるの交時七月夕時分根岩
邊におゐり、彰義隊のりの八九人より、さしひの交右三
人と、先きき、是れ、た、不へ、連、是、越、を、は、中、開、ひ、は、ど、も
新、ま、ひ、交、速、極、切、然、時、時、お、我、ひ、ひ、し、し、ま、人、の、其、場、ま
て、切、伏、ら、れ、敵、あ、人、打、ま、く、く、六、人、又、子、を、負、せ、し、る、由
ま、由、是、ひ、は、ど、も、於、過、く、あ、人、殺、馳、集、ま、ひ、に、付、を、接、あ
人、の、切、ぬ、け、約、込、ふ、結、本、所、觀、音、堂、あ、ま、ど、引、れ、ひ、し、し、

に、事、度、ひ、は、ど、も、皆、深、子、を、負、ひ、上、陸、こ、還、ま、り、ひ、に、付
不、以、心、ま、人、を、切、腹、し、し、ま、人、の、者、も、割、腹、致、ま、る、く
の、交、子、鉄、炮、を、も、つ、く、打、伏、ら、れ、ひ、探、索、方、之、者、届、中
出、ひ、に、付、過、く、確、證、を、め、委、細、マ、中、よ、ひ、は、ど、も、不、能、敢
中、上、ひ、以、上

五月八日

薩摩藩

○

同日廿二日、横濱製鉄所を、徳島家へ引、つ、く、こ、き
左の掛、ま、役、人、の、江戸へ引、れ、跡、横、濱、定、役、由、雇、ひ、ま、お、成
ま、ひ

名前左の通

九條掛

志村左一

附及

鶴 右十

山本半

入費掛

志村左一

山口誠一

中村民五

恒川成助

分配掛

川久保忠兵衛

清水孫十

近藤豊右

永山富右

倉庫掛

福岡喜四

横井孝之助

大崎左吉

山崎弥一初

○
上野山内はく官軍方の兵士十二三人を生捕るによしに付松平左衛門右衛門のたむげ裁きを以て交文に承伏せ居却る急激の返答よあまびい由

内外新報第四十四號

慶應四年五月二十二日

○
水府の武田金次郎 先年中高名を以てし武田 耕雲齋の孫あるよし 川先次郎 師よを為府致され小石川の邸中よ在としが此女二日巳の刻迄各戸表へ内國のよしにて出立の形程いとめづしとて見あるものゝ様をしを其まきとある

第一書 丸の内よ水の字白地へ黒く書たる四半

の懐をが

第二番 砲 不動如山、 脩地へ上の五文字を

く書たる旗を旒

大砲 三门 車甚はそ

第三番 銃 動如雷響、 本陣旗をあらざれ

小筒 二行

第四番 不持まどし花菱の紋付ある旗を旒但し

級と
も朱

第五番 金の花菱の馬介を

武田氏へ馬上はく白毛の下でし立烏帽

子を点し小具足程と純の陣羽織はくザイ摩

を腰にさくもろ

同舎弟 馬上陣

第六番 鎗 其疾如風、 本陣旗をあらざれ

檢隊 女人役

駉馬 走人

第七番 監 其徐如林、 本陣旗をあらざれ

第八番 輜 侵掠如火、 本陣旗をあらざれ

右隊中士分八十人許勢百五十人ほどあり

全隊の士白練へ赤地強欄の襟袖はく付ある陣服を

通用は隊長の立烏帽子を点し其粧ひをあらざれ花菱

あり

才三十三号は志をせし本假刃はこしらへる直
繁松の抱ひ世襲よりのは文あるが五八人あり五
百人の誤るゝん款

○

十四日上野戦争の節官軍方佐の藩習取春朔
ある人の計ひは山科料理業を^{かん}の二階より
まどれごに山内の敵を掃ひ打たせしは
竹並の隊や下の方の矢束を破り切入世子を破りし
と或る藩士の傳へし

同じ戦ひは東門内を屈竟の勇士とお見へ七人ほど
討て出大勢を切るびけ引つけは節悪くあはして二
人討死四人は門内へ引れし

周勢先登は進み廣小路へ向ひ戦ひしは薩州勢と
入きかまて天神甚の方へ出る薩州勢は東門口を
攻破しし

長州勢は谷中の方へ向ひしは地勢よく敵方より
の木蔭より移しひ打りしは甚く苦戦のよし
薩州勢富山侯をより繰出し武百人ほど振津の方
へ進みしは東門内は彰義隊の士武三十人程

固め居て又接戦しお成り志づくと推し合ひて人強
勇の者とお見へ踏ととどまり奮戦しつゝ以内彰義
隊の者ことごとく谷中の方へ引つけ右の士を人ほく
官兵式三指人より手と負たせし場と去らば討死致し
しよ

○ 日永戦争中臥竜隊の兵士殊に激戦しつゝしよ

上野戦争の跡兵音羽後持院へ移りし風岡有とて
て官軍総本侯佐賀侯に介し四藩に軍勢去る十六
日午後日院と闘い穿鑿有とてしよ潜居しゆのしよ

とおえへ夕刻解兵しお成り牛のしよを通り引上げ
しとぞ

甲州路の方へ大勢移りし風岡有とて十八日藝
勢四ヶ谷新宿へ出張有とてしよ定て退きし向ひ
しとぞんととの風岡有

○ 小石川山麓道町より通り茗荷谷徳雲寺とつゝ禪院
へ去る十五日の夜歩兵百人ほど落来り同古に去り我
服ぬぎきて仕度しつゝ小菅等のしよしよ何れへ去
去しよ當十八日固勢の勢しよ大砲二門を介統

係はてぬかこ住持へ談判と交事の体少しも隠さ
ず徳川家恩義のためおしの内休息致させぬし
お首元も終りぬし小銃四十八挺と並りぬし
持ハ内石連をとお成し
其節和化僧を人階と見捨がうかりぬし
よし其後門あきりの一日官軍方へ款程としてあな
るどお出しよし其後いかにお成し
世時あ戸の武田勢援兵として出張し

廿日幕府官軍の法廣野お急へ出張とお見へ返す

位者通りの

十六七日の夜上野山内へ入寇民どもおと宛茶
の跡を抽出しぬし退く大勢押し入法及具
等を置出しぬし門とメにお附不へ抽出し
ぬしの内調べとお成し

廿一二日以法方とて佛書類又のちそと家具等
有るを隠す者大と送致しぬし右の全く抽出
しぬし調べとお成しぬし

○五月廿日伊豆守致す後し

勝 安房守

織田和泉守

山岡鉄太郎

岩田織部正

大幹事役々 仰付之付由政事向は関係い多し
所用向を起るを扱を旨了らば其意以充る公は
可然向くは害く及増並を扱て致々事

五月

内外新報第四十五號

慶應四年五月二十三日

○同日八月八日出山形ト其の来状

廿二號ト出せる山形来状と参考を以て

去る二日庄内勢仁田系^{ニツタ}にて津基と中五へ屯在し天

童勢溝延^{ミヅノマ}廿二号^{ミヅノマ}儀^{ミヅノマ}延^{ミヅノマ}は^{ミヅノマ}勢^{ミヅノマ}増^{ミヅノマ}多^{ミヅノマ}を^{ミヅノマ}出^{ミヅノマ}陣^{ミヅノマ}し^{ミヅノマ}お^{ミヅノマ}成^{ミヅノマ}最^{ミヅノマ}上^{ミヅノマ}門^{ミヅノマ}を

隔砲費に及びまづしく打合ひをせしむ庄内勢行方し

川を越り津窪の目^{ミヅノマ}廿二号^{ミヅノマ}窪^{ミヅノマ}内^{ミヅノマ}と^{ミヅノマ}中^{ミヅノマ}五^{ミヅノマ}と^{ミヅノマ}相^{ミヅノマ}初^{ミヅノマ}り

勢増を海延多きを放火しし翌四日己の刻天童へ礼

入市中へ火を放ちしに付磯田勢海延よを引返し大

防まひへども酒井の多人殺又打志くまされ織田勢叶
 る散乱しりし由城内にも家中の面く我先く城
 に火をかけ落し故諸方一圍火煙とお成し軍師吉
 田大八廿二号大炊又を人天童の棒を九のたへ踏こ
 止まて防戦ひ多しへども多勢を引交ひるゆへ是又
 叶りし東山の方へ落し逃ふが三日夜引返し
 血戦又およびゆ一尤も敵の首を口ににくり一ツ
 のたのち引さげ血刀を携へ落しこと近以英雄と
 中唱ひ天童侯の関山越はく仙臺へ落られし相
 山形より百人許山形より西北長傍達摩さ口へお固

り居し是へも酒井勢押せ炮戦して劔闘もお成り
 双方互負討死多し山形勢の死傷左の如し

戦死

- 大久保 屯
- 赤星守人 モリト
- 相崎叶四郎
- 前田勇次郎
- 前田庄助
- 加茂政秀
- 稲田才平

深子

岩永郷古跡

申子越え進

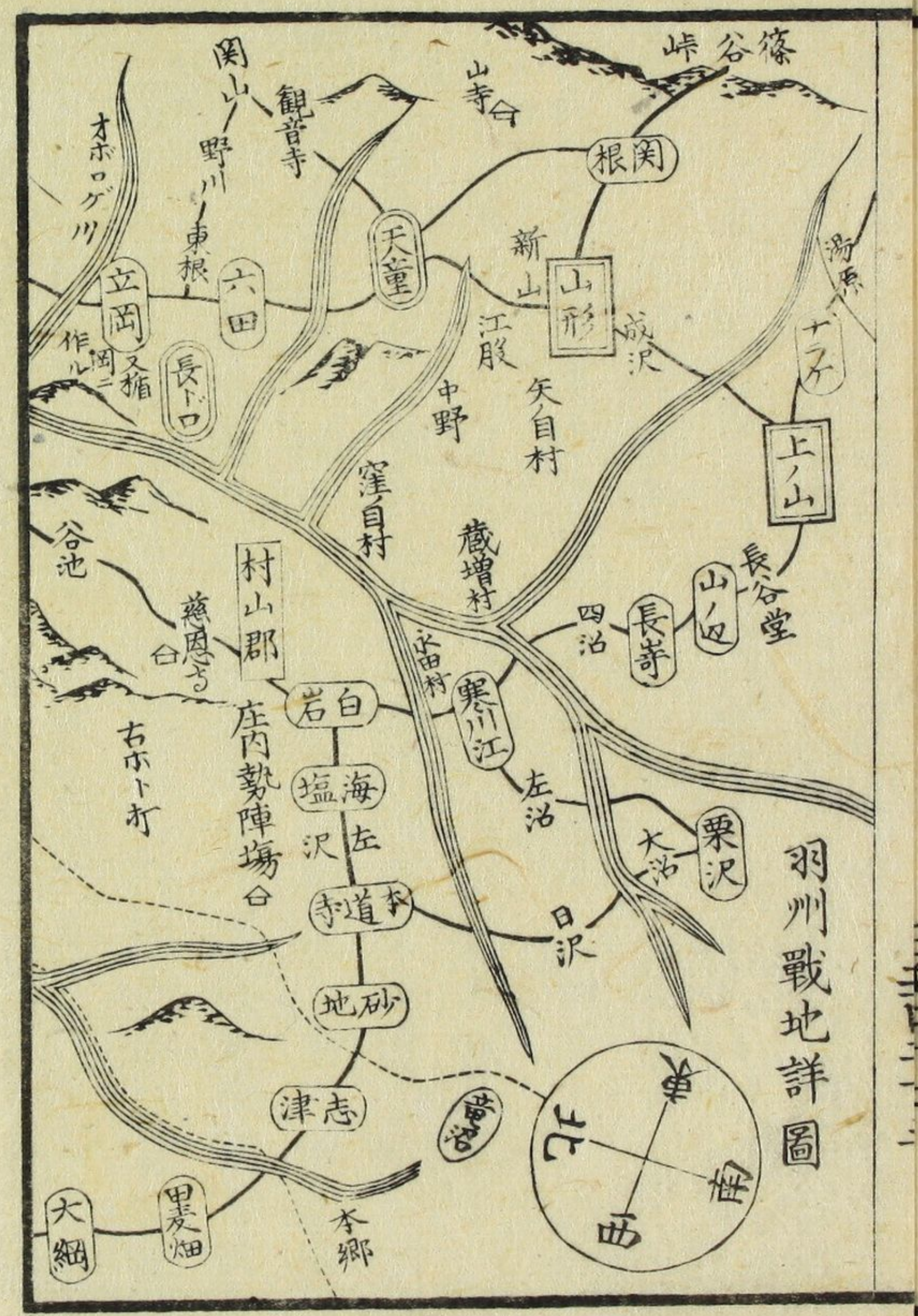
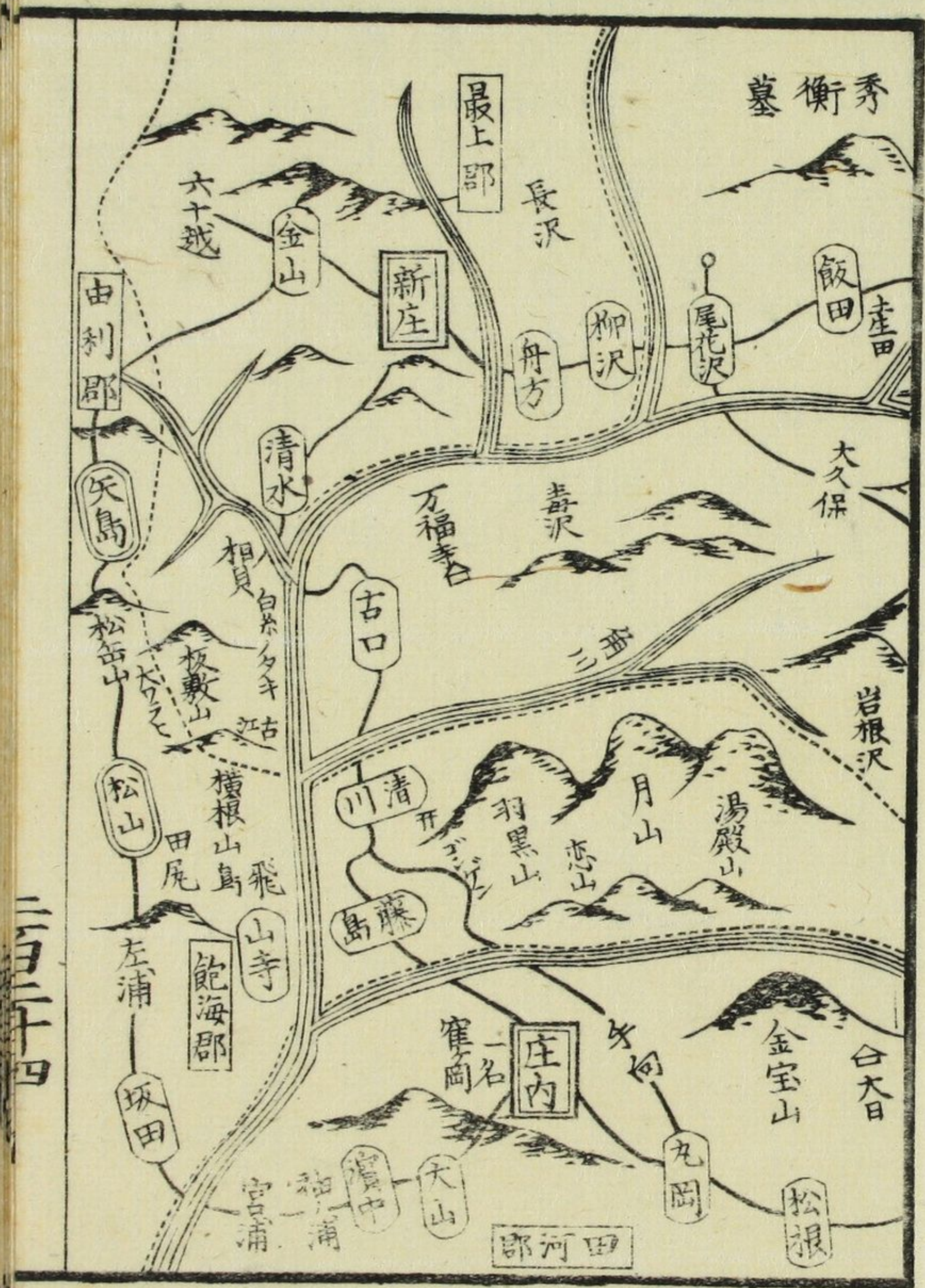
子負

津久井原古跡

稲垣道古跡

右行きの余程く働き有る山形侯の威人殺されし由
乍去庄内方中々強勢の如く尚も疑くお見へ申す内
左邊アノカ小文治の如くし子の者三百人隊引去るがく庄内
へ加勢い多し由日夕方と山形へも押寄りて我

以て市中近きと雖も跡らに家財法道具片付老人女子
の在りて立退大混雜の如くは三位殿の新庄城まで
引出陣と成り上り山形より少人数に合六百人程
附随ひ新庄城の如く申す陣をへ放火し其不へ屯在
し其時天童の如くは付引返し楯固手土生ハブ回と云
ふ以て庄内勢と出合六日午刻より大戦と成りしよ
し未だ勝敗の如く申す不中且五日筑前人数九十六人仙
基岩沼より立越六日以後又同藩五十人洋湯の系へ着
一子と成り山形市中教を以て已り口とを固め居り
不庄内勢西在遠不とて費を立以て付日夜光助を出



二百二十四

二百二十五

ちと出立下家所新門さへ二夜始て今日の寒門にへ
 お越山形三日所用のく令兵隊畔後吉井又八日町
 同向かし為吉子ふども双方七拾人隊引連山形へ加
 勢として兵出竹是ゆ捨を引提突といかめしき事以は
 座以市中ハ助家又お成り土着目ぬり以多し以少へ承
 湯味増為責人等と只と騷發兵在い今日も長溝へ放火
 々々々々其外午の刻以て多勢近在矢の目と中不火中
 焼失又お成りよし

○月十一日同不ととの来状

八日及官軍決之位殿新庄より引戻し指界とを三里

下尾总沢以て戦争官軍勝利庄内勢を川向を退借官軍
 つらむく門を渡り白岩^{廿二号}白石^白と在出張庄内方の
 ぬけが六十越と中不の入口を立切る勢ハ薩長山形
 上の山、都合八百人隊と中不はと十分とお固め居以由
 山形下をハ麓おの人數百之拾人隊先子以て天童へ
 且て以て天童下を又以吉田大八先鋒として手勢百人
 隊引率十日己の刻以て永田村へ出張左沢小文治子
 先く者日以悪徒共といれ此此者の家へ放火し三人を捕
 りてまより以畑と中不へ之裁農兵組の大羽口夜兵隊権
 内と中者を生捕白岩の陣不へお渡り中不右の先日庄

内勢へ手修ひ天童へ放火しつゝいりあつし世及び
左澤小文治を始め農兵ども三百人も石捕り中且籠め
勢左は之を越河井勢と挟みつゝ致用を以て交戦又十
一日白岩へ寒川に上り騎出し大合戦とお成り己の刻
以下未の刻まで砲戦引つゞき接戦双方に負付死者
有る庄内勢叶は引退きいし世及び如何お成り武官
軍方は是非とも庄内勢を逐散し小文治を生捕りし
配の勢に由る余の退くつゝ上り

内外新報第四十六號

慶應四年五月二十五日

○甲府より傳來抄出

去る八日水野出羽守よりお達し

一當城徳川官を御書致し居り専光様と御
王に二意執定書出せしは不お替結御致し以時神妙
し系以て然る事今般田安藤と即へ徳川家お徳社
徳川家へ頂降波成りものも了有るまゝの世後御使
望し有る以族もゆるめく右に平生く見せ給る定未

と存い衆物を忌憚りたる十日中右出程に於て後復ゆふ
望し衆を眷族等と連き交度個に於て武有るは所を
恙ら下又い是をのごとく
至宝は少致度等いぬ所極くも清後利に在るに一祝
同仁と

思食し奉戴し生瀦し活計迷ふ安定し去就に於て出
副総督府

東海道鎮撫

副総督府

番謀印

右為武出の向て十日程の交度にて水登出願者
附法に之由武のよう

○又月廿八日同書抄在より来てし農丈の吐し
武が所を悉都版尾在社仁とつくる方あり山中にて
至く要害とれた地不ありとあるも少以東敵山の跡を
のよし多人殺して七し近頃の農民退くをせ加たり
之を悉く糧おびたがしくお集め所戦の用をおとす
然る所へ官軍方討て山を向る海河より扇所を遠へ
宿陣し交する廿二日夜浪士勢不意に押出し本砲殺
十挺其外小銃はく打立の故俄くするは官軍方より

此の執に西存いそ後の戦事ゆゑお成りや女守の
と夜より女守日よあひく新室へ熱勢引よやよお成
ていよ——但し版社いふく放火ゆゑしとぞ

秩父急の風習はく年々益以て大むせとゆふ村
こよりを大なる減きそへてそ大なるまありてい
本筒の丸く一このへ長さ六七尺もあつてし竹た
がとまらぬ向うかけたり世戦ひも用ひしに多ふ
世筒あつと云へて又世急の将人多く信右氏世者
ども隊中へ加えり大なるきしとぞお成後の
事實と云はば退くまらぬべし

相州小田原辺の 事次号よお成り

女守日若原東叡山よあひく官軍方より下谷湯へ
お成り中約二浅草根家辺にお成りへ十日戦争に
て難をせしめりく施承り

何々者まきりものとお見へるの本筋はくを重し一回
は方おどの箱やうのりものとゆき筑前体の人と多ふ
救はく昇^{カキ}旗お成り十人ゆき津野^{カキ}後あされお成り

日新五つ半時以小石門傳通院前を涉通りし如
何あるものやお多しは風聞のいふ 東照宮様
の侍る像あゝんかといふと相見の法人も又涙
さしぐらゝり

去る十六日新筑お辰田園跡原山門楊儀に在りそ
級をまじふたまきまきし有とよし

上野山内脱徒

山田平次家

二十二才位

白金古亭

四十八才位

○志ある羽の藤士ちんがりの妻國作へ出立の
折その婦又わらわを却ておくましり
あるとせゆる人のさしこせりまゝに志あり
ぬ

春あるつまぐあるまゝ華とせりふと世の中と思ひ
くもれ生者必滅命共空誰の長ある人ると抑
め意欲よりくるまぐ凡性あるもの世理をせにたゆ
然がくくやき然が口海浪志づき津代のその始め
美玉沼徳川上よ二た美の松のせひ初くみとせり
ふ其以上やたまの位そあるとせどお上の辛苦憶ふ

残る深岩を志めきつて芽出夜老木と成てとけて年
く枝葉葉へけつて百年うとたれめきしゆむよわく
や月よ雲ささる秋風よ今いとも根きん枯るんやう
さむい歎くはも程のまりあり傍にもつふごころた
のむ木の下ありくを催うの純のかちくらんたのふ
穉もろちしめりかよした子もちりぐよやくえん知
らぬ大和路やぬて末蘇路キッジのゆもるく才のおもり
さん定めなき世行まへに催をかち志る人よせんち
砂の松もみ葉よ限るといこきるん生者必滅念志空
誰の足ぢもく是地ありとさきと純の元量の羨きめく

ま如の月の明くなく遠くを夜しを地獄の責ア、悽
きうし〜まきいまよんどんまきよひぞ

かての世のうりのまき終つ〜くともほのせた
のまきゆ〜ゆりせを

○

神田次田丁へあ大所の大福一神打まき有る由届よ
お成ひ香光町内はく大切よ〜〜をひ有清沙汰の
かめむき石へ糸備の人あかよ有るよ〜〜きもよせ
戦車は日玉より持出しゆりのち〜んと町方のめめ
吐しあり城よ世の礼を多る候とふめゆんぬこの

多かり

内外新報第四十七號

慶應四年五月二十五日

○横濱へラルド五朔廿二日開板新開抄紙

為港に投錨せる船の熱計二十を繰るう世船名及び出帆せる地名とこゝに著帆せる時日と尤も揭示は

チフトリ船

蘭ロンドン噸より四月六日入港は

イナガワ船

サンハイより四月五日入港は

ケレフレックトレ船

フランシスコより三月十五日日

アター船

ホンコンより四月九日日

ホリハル船

リヂヤ子占より四月十日日

パンテウト船	兵庫より同月十八日
オレース船	同より同月廿日
モ子一タ船	ミアムより同月三日
ベ子ハクトリー船	ホニコンより同月六日
ソツピアヘレナー船	ボルテウスより同月九日
ブラニチ船	カルジヒーより同月十三日
ヘルマン船	インラニトニーより同月十六日
イタリー船	カルジヒーより同月十七日
パルメニオ船	ロンドンより同月十九日
シヨンプラー船	同より同月廿六日

ス、スヘルセー船	ニウヨロクより同日
ケワ子一船	同より同日廿七日
アルビオン船	オーストラライより同日
アレキサンテル船	ニウカストレより同日廿八日
エンクラー船	カルジヒーより同日
ハルレーホルジ船	バルチモールより五月廿日
オシクルドヘー船	ニウヨロクより五月五日入港
ヘロシチー船	ロンドンより同日
ラ子ルコスト船	同日
ハルリート船	箱館より同日十日

三十三

ブラーへ船	カルジヒーより右日
ハムエリサーベット船	アムステルダムより同日十五日
ジヨンミルトン船	カルシヒーより右日
ガラースメール船	プレーモートより右日
デスハーチ船	兵庫より右日
アテン船	サンハイより同日廿一日

○
 総舟作中の密謀して佐倉侯内親王にお成り藩の兵
 二百五十人程にて守備被居り此日日本水戸津辺
 へ何方の脱走りや山宿り〜近辺徘徊り〜此勢作

余の藩士聞付に捕り執ちりしを脱兵の方へ候は
 聞へしりや去る十六日取敢え人殺お集め十七日未
 明志のびやうと佐倉侯へ押しよせ裏手より不意に
 大小砲打お討入り付候の事以て防戦り〜若
 佐倉侯の小船は密に福津と巴り引と脱兵の生れ
 以て城中の兵悉く集め是又船は積り〜何方
 へ乗出し小我お知れざるとの候なり

是後佐倉の藩士引ぬし小交を人もお手無き乃其
 城と守居り〜
 脱兵の多分小田原に集りしと云ふ事

○ 此後、豆、後、の、間、陣、の、外、務、が、委、衝、た、此、來、出、來、若、津、津、
城、も、落、去、し、函、館、へ、も、屯、集、せ、し、兵、あり、又、小、田、系、城、も、
何、と、う、成、功、し、る、と、ま、ち、く、の、風、吹、ち、れ、ど、先、陣、よ、り、の、
長、為、は、く、川、々、の、満、ち、あ、へ、く、通、信、不、便、と、最、ち、ね、を、行、
方、よ、り、も、其、報、告、未、く、近、日、從、從、と、い、く、法、若、く、若、ん

○ 才、一、大、隊、歩、兵、先、陣、脱、走、し、て、野、原、に、あ、り、む、と、四、月、十、
九、日、以、降、津、官、城、と、一、子、は、く、攻、む、と、し、其、後、發、札、し、て

何、方、と、七、集、せ、し、ま、や、お、お、く、は、世、節、三、百、人、洋、隊、長、從、
本、某、を、初、め、大、田、系、城、へ、攻、よ、せ、官、軍、と、戦、多、に、お、よ、び、
必、死、の、劇、戦、を、し、て、遂、に、城、を、拔、き、い、よ、し、を、も、多、分、死、
傷、の、有、く、と、の、事、報、告、あり、又、一、從、に、右、の、官、軍、白、旗、を、
出、張、り、た、へ、攻、よ、せ、城、を、拔、き、放、火、し、る、し、ゆ、故、に、も、
援、く、勢、を、く、故、事、に、引、退、き、い、執、り、も、き、き、あり

○ 統、創、の、養生、を、怯、む、を、戒、め

或、人、正、月、伏、見、と、戦、多、に、胸、の、左、辺、より、脊、中、へ、かけ、
矢、彈、は、く、打、抜、き、し、が、幸、ひ、又、肺、腫、を、よ、け、た、り、坂、地、に、
く、一、方、夜、療、用、を、加、へ、蒸、氣、和、は、く、十、日、を、經、く、東、海、し

医療十日にして脊に余あり九十日にして胸創金
 ざれとも痛を患をたり快氣は任せ出節せんと試
 又三里をかりの石を片路を歩んと思ひ出し又余
 等は暖せしうばを日より尤の肩は痛を散せり医蓋
 刺せりこれと蒸せると十余日にして治せれば
 ツフを用ゆとつくども金へば内かく快く又二里
 計歩行し七日の痛を覚ゆまゝ再こして創口の痛
 を護し三日余を経て創傍は清肉一層を生じたりを
 の時外医を請ふ示せしは全く歩行の故なりといふ
 是より創口はパツフをわどこし薬湯にメルキを用

ひ^{コニヤ}薬膏をわつて蒸し四五日にして肩の痛を治され
 ぬ頻りに蒸せると二十日にして大に快し医戒め
 て曰く是を刺し貼せると膏薬をわつて又これを
 せくは縋布を以てせりものを脱体を動かさしめざ
 るが為なり起臥初揺さるも程治效を速くする能は
 況らんや行歩さるゝわつてやと実験せらるゝ世
 今百又十日にして未だ平愈せざ一日
 門を出るを痛十日治せ一日茶を指を痛之日歇
 まは重きを治され或ひは五六日より竟に終身
 の患とちる戒めさるゝらんや

方今騷擾の世玩創を彼らものまさよあからむし必
しも少愈を負んご性命を乞つごごちあはれ

内外新報四十八號

慶應四年五月廿六日

○小澤雅樂助先觸書

一人足

五人

一宿駕籠

一挺

右ハ世爲東國鎮柵の爲り高松皇太后宮少進殿御通
り江村以江村御先用とて御殿隊長小沢雅樂助
御勅宣御傳書持系にて甲州府中令伏家より甲府
まぐり通す以同宿とて御通すを継ぎてす以以上

二月初日

方松殿

所及所

二日基箇系宿

二日甲府城下

○甲府新聞

為二月中旬甲府に締りての爲に加藤丹波守殿甲府へ涉
着官軍方二月四日甲府へ至

同時所勅使として方松皇太后文少進涉兵隊長小沢雅
樂に助位を大名と供其に交還せ給 勅使おろし
りて方松殿の位所酒造候より京都へ涉る送りにお

成り小澤雅樂に助の二月十日甲府にて斬首に
たりし右傳 勅使甲府滞りて苗在村にて記涉朱平
お酒を涉嶽山イタケの涉朱平お奪られし

之月朔日該極隊として新撰組のよき久保別内
為隼人凡武百五十人ほど大砲小砲を携へ先鋒を以
て甲府城へ入込

同日甲府城を初核宿宿へ兵日經之内梶原監持等松
と助奈條岳と助岩村涉代友出張及所へ入込之糧軍
勢不足と旨をりつて神藏農兵を乞ひ大砲を借受
以付鎧合と手代の逃去り内禮一宗寺人跡も在り

法書免出に大久保副の榎橋岩左強敵村を掃き住信
案内に之を以軍の交戦又之月四日官軍方甲府まで退
くより取て又退をりつゝ栗系岩まで来ると官軍
先子因勢甲府出立より一風聞に付勝沼岩柏尾山
まで引とて横吹と中切石に大砲二挺相かまへ柵を
結ひ谷川の橋を断ち人家を焼くを以て付かけ以内
官軍方の因勢土が勢兵因勢隊と戦ふに相成り因
勢大砲を發し年の下刻とて申の上刻まで打合ひ
因勢分隊は多しお沢村へ下子南岩傍村へ下子さ
し出し遂に新拵組敗れ多し引とて申の西曲島の

ごと

九日とて甲府所城代の水登出羽守佐松代勢遠が掛
川勢凡そ八百人以内在り
廿日東浦乃副先鋒越智柳原殿沼津に出立甲府へ涉發
向所親兵の井上勢隊長伏谷石左衛門加勢伴勢法
勢有之に系謀の海江田武次に在り柳原殿馬士山
吉田に涉通りと節石石富士津間社殿司より日本武
為^{ミコト}東征之時の吉例をりつゝ涉被^{シラヒ}勝の本著敵上又お
成り甲勢佐代友之部へ系赴りおわく涉を發し
下以とて石和勢代友某田桂以市へ介代友子代お

係ひ四月十六日出立上系お成り

○三月五日新撰組の者口達書と字

一今般甲お表法控お成り徳川家と清めお力以て
以族ハ成功と上 清沙法と以有と以る世候心候
の为り中達書とりのあり

三月

大久保 剛

甲お

寺社

百姓中

○谷村及不係書

孝 松と助

东條 岳と助

右ハ内所用有と以る法控隊として其裁以に付て凡
計りのあり

谷村及不

谷村とと

上右田村まで

右村と役人

○

四月廿七日吉田に馬士沙石社より所被表信勝の本著
大熱督官極へ献上又相成

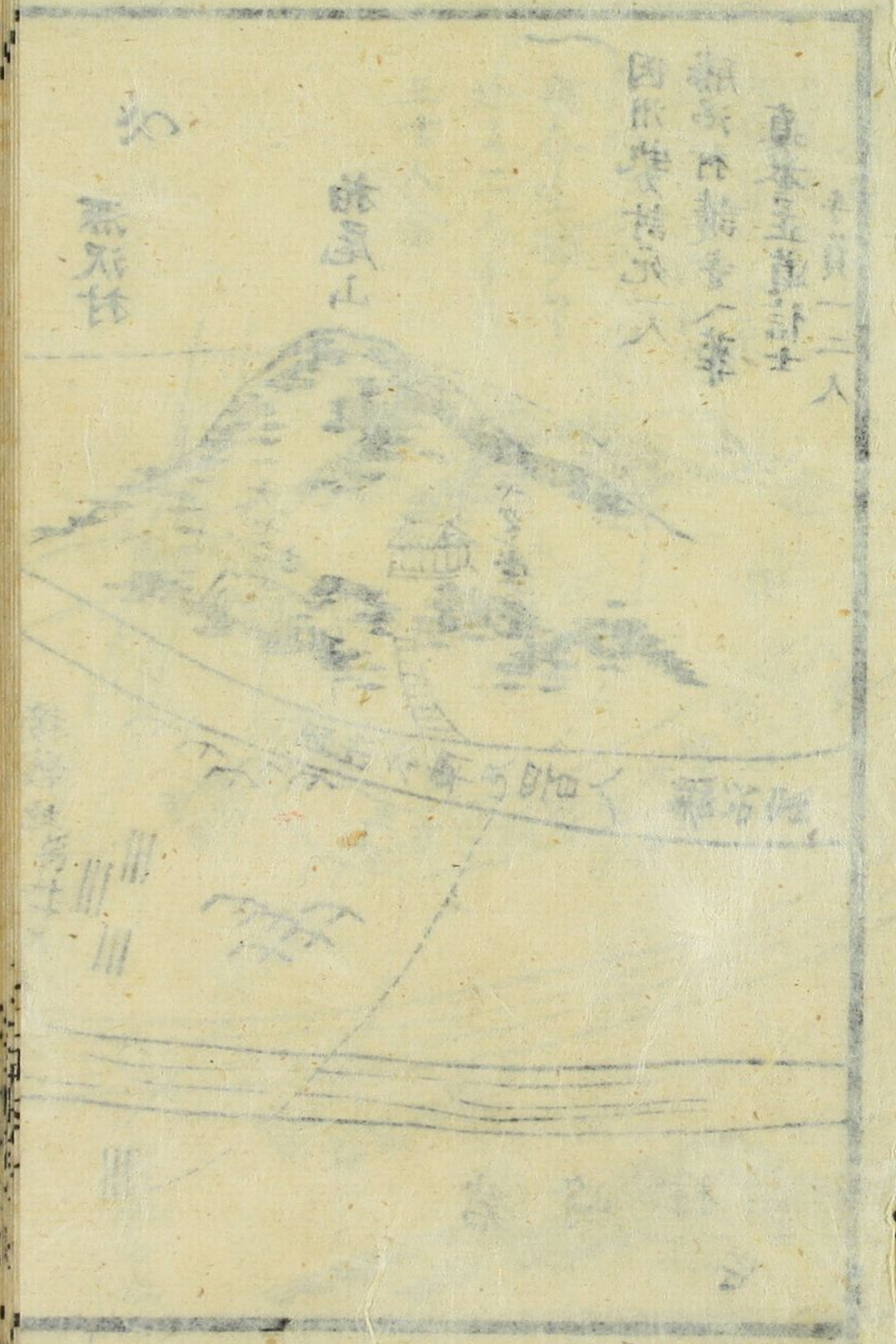
同日葛西新宮率我因お寄はく首七ツ付とる

同夜尾お沙附為正氣隊小栗篤之丞その外新宮へ出陣

ひびひ

○

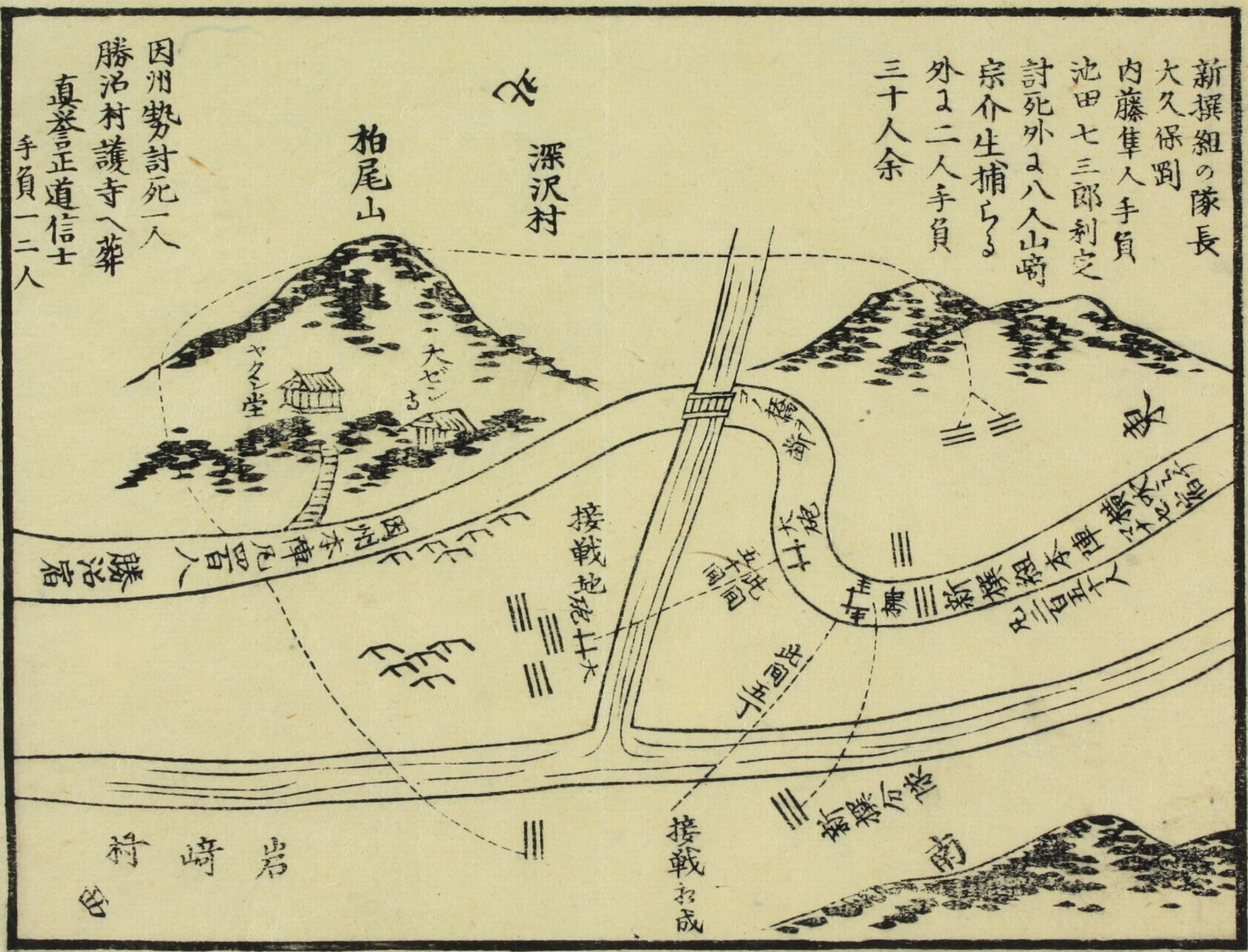
右甲州事實英官軍某の寄贈せしおるりそ篤志と
情お我の間多た感佩とたふは如世はて始りて報
答のては得ると信ふが—豈海内新聞局の玉粒と
る不よりひびひ



右甲州事実... 官軍某の寄附せし... 不ろく其篤志... 情抱我の間多た感佩... 如世... 始り... 報... 告の... 流... 得... と... 得... 子... 等... 峯... 内... 新... 局... の... 玉... 取... 在...
 る... 不... 下... へ... び... や

新撰組の隊長
 大久保 副
 内藤 隼人 手負
 池田 七三郎 利定
 討死外又八人 山崎
 宗介 生捕らる
 外又二人 手負
 三十人余

因州勢 討死一人
 勝沼村 護寺へ葬
 真言正道 信士
 手負 一二人



外事

田安中納言

右日文云

五月

内外新報第四十九號

慶應四年五月廿九日

○補遺

○横濱「ベリリ」新聞紙より抄出

一三月廿九日即日本二月晦日英國の公使系船一ある
之

帝王に相謁せんとせりある途中日本人に襲をうけ
初め中井幸翁外使館の僕を引連せ又公使館
護騎來り公使直に出立し後者象二郎といふ官の
人ありびし通弁官「サトウ」をかくさるるに附随し其後
の従者横濱^{ヨコハマ}に曲らんとせし時針らんとせし公使館

よう二之間行過ぎしが難きなるおより致多の日本
 人不足しあ側の位居より飛出各あは^{エモ}獲物を持ち
 尚てまぐれに切付る其内は中井孝義馬上より飛下
 りて大に我ひし^レが石につまづた既上は^レ舟と交りし
 思ふは悪流の内命かけは^レちりしものを唯二人の時
 後着象二郎は^レ仗に附るひ^レ舟とあぶ角とまがらば
 馬上より下りて^レ世形容を見く^レ舟しが中井孝義の
 危き^レ救をんと^レ馳付け^レき人を救し^レ亦^レ人の後
 獣の^レぞ^レ破落出別^レあ^レ馬を^レど^レも^レ舟に^レ破れ
 ま^レ陰刀ピストルの^レ舟と^レ交り^レど^レも^レ仕業の^レまき^レ

突しおどろく^レ船し^レ遠く^レ逃去^レり^レ「こニストー」
 ら
 舟に^レ行き^レ舟の^レ愛も^レなく^レ怪我人^レ多^レ旅館へ^レきし^レ度
 せり^レ医師^レ多^レ熟練^レあり^レこと^レ突し^レ賞を^レ給^レし^レの^レる^レは
 多くの^レ怪我人^レを^レ療治^レせり
 一^レ囚人と^レ吟味^レを^レか^レし^レし^レに^レその^レの^レ初め^レの日^レ叙^レり^レに
 元来^レ大坂^レ邊の^レ俗に^レして^レ京所^レは^レ末^レに^レ神兵^レは^レ入^レし^レし
 言ひ^レし^レが^レ遂^レに^レ同^レ類^レあり^レと^レか^レか^レ人^レを^レ殺害^レせん^レため^レに
 来^レて^レし^レこと^レを^レ白^レ状^レし^レ後^レ着^レ象^レ二郎^レの^レ例^レし^レ首^レを見^レま^レる
 は^レこれを^レせ^レ既^レなる^レ多^レを^レ白^レ状^レし^レ再び^レ白^レ状^レする^レに^レ

かゝる内難ありと是を成捕へられたる

一唯二人はと英吉利兵士七十人を襲ふとい實に大胆
あり

一時時系所政府のおを我為の爲めこの晩を去り

皇帝公使へ見舞の津使者を遣はされ又津大名前よ
りも津使者をつりとりしり系所政府の親しきこと
この日本國中の津獨書とてしるべき事よし其書よか
人々を殺害せしむりの刀劍をばよられたるは日本式
に志さぐんは刃を別獄門にさしせしと世に公使を
襲ひし時の囚人知ぬかか玉人を殺害せんこと成た

くらし者ちねどもかか玉人の親切に極まれ感服す
大に後悔せり

一世騷動の翌日公使は外官の人より日本三月三日の
お偶ちり公使大に喜び翌日系所を引去るひゆり
者重しと驚き困ちり伏見に系所官の人よりかか玉人
のまひしよの囚人を罰し内難のりのの取と一お
さしせし

一當時日本の擾乱は未だ如くせんか外國人も懸念を
るおありあられども天帝人を捨てかまはば振くる
よそのを以て然るをたると一時の真に英人の共

一傷む所とりくども馬んを日本開化のよきあふ又
凌駕するの源峯是くやうきると知らんや唯然くハ
當時

朝廷は修政をまきくりのよき用意を裁し天降の
玉中あふのえ悔ととう内介事務を裁割し毫も其間
一私曲あらせり一志をいして氷のまじく一深き
がどくくせのまきく一熱まら如ぐんハ亦運んのも
英國教師云ふ

「パークスを傷つけあつりのも医師の息にて愛名
朱雀操と稱し十九才あり」

○
才に十を号又下答を花を委へ官軍階伏せしよしと
裁ありしこれ今く傳聞の誤りかゝることハ更
ニちりりしこと明らかり

題名

よき人志

つれくは倍る友かき社めは志のぶく毎の五月
あるを

○
五月十日日戦多騒ぎはく上野山下をふりお屋の

るどあるよし王子思へ逃しが救回ふりつゞまきの大
るほく荒巻山下の川水漲り崖をゆきまのりの流も
わうね計をちりしげ懐むをし彼町人逐ふ出まのり
又溺れ死せり土人も是をえり援^タたぎをし後をくそ
を引上るるよし令ふふ方と風長まよつくと脊負あり
と嘆ふふ令のまきもかゝるおよの塵芥よしとしく
刃命を救ひがとまきの思ふる

○

不月廿七日越中碓氷に法隆寺に碓氷有る各隊の壯

士と対向せしめ彼方より小銃打出し本劔をもち
戦闘せしと突よ烈しき碓氷ありしとぞ

○

不月廿八日辰野宿へ甲府住居の旗本志のよしを
いはい甲府にむせ後期居よお成り人との介の同
おく住居お成らぬのころを引とひ出射らぬの
よし大勢のりゆへ宿中まご混雜の扱あり

○

不月廿九日薩お侯藩士大勢出ま定めと暮おへ出陣お
るべしとのり

○
此頃利根川へ死骸おび多し流を來るよりよし定
めし川上はとて戦多有しあるべし大利根の方を心多
きよしそ邊のめりて活しあり

内外新報第五十號

慶應四年六月朔日

○福島よりの來快寫

一同四月十九日朝

勅使碓砦に於て教諭給ふ仙臺侯人殺さるるに福崎
侯の人殺附添ひ福崎侯教諭

勅使通達に奉也へ此道御路を固ハナシ及んば是れ
乃獲龜之然とて之を戒めおごるる事とい
ちん方を二本松より同日夜本宮殿へ此一泊は成
小寺十八日より十九日へうけく白門表へ出張の仙

甚るのさし引をいよお成り程なく今降の兵二
百人降り白川へ繰出し山外にお坐へ以て付本宮様
より二本松城下と所本陣へ止宿をせし是翌廿日
もあつた清浄なるなり

才三十一号又碓砦おけ四月七日白川へ出陣の
よりまゝ二十六号より十日及び日の以て白川へ清入株
と志るせいの傳聞の誤りたるも世來狀の誤り程確
報をゆり

一羽お夜上迎初揺るまの去る四日夜より五日六日
まゝ二十六日再戦し天童戦多一且お坐へいへば唯今官

軍勢小人殺新左衛門出陣はくそのちの合戦略く
さし中にもなり

毎夜篝火のさし白川辺の山と西今降松山辺より嶽
山西山道お候が川よりまゝ大かどを火はくさ
るが暗夜も白日のさしはくはなり

真が福碓

横家路町旅宿

某

同日月廿八日

○

又月廿七日薩州蒸氣船海門丸和浦へ入付此日廿九
日の物色日出帆志舟三十九号二記記ウオルキユン九浪を
鉄入津し平段より富士山艦ありび又介を渡し但
鉄入津志より

上総より去る廿八日出立志吐し又房州
也と脱走兵ありい百姓一揆等屯集するより下
総休余侯の人扱出張ありしよしと少々り

○

同亦へ官軍方十名をど出張奉令し旅宿し村と反別
丸箇等名をこれ調いし

○

川越は戦多ありしよりほく南亦へ迎が来りしりの
ありしがいまと確報を以て

○

又月廿八日掌海生フロイセンオルカーン船松山侯の着物を積
こりて和浦を出帆したりしが何ゆへに松山へ上陸

まゝに能く備へて兵庫へ出せしむる事なれども世
地へもまゝに上陸する程に既に空しく尚地へ内着
せしよ〜世船へ乗る事なるからきりの吐しなれ
ど竹竿の故あること未だ詳ならず

○

又月廿二日出帆志する横濱新市中又土州人同不市
中又わろ〜^{フラス}西人と切害せしこと紙のせなり
且つ〜とも町名を〜び〜時日を志するさしに後
報を〜く之を詳ふせん

○又月廿九日

病氣の身程と重りしゆ収事免

日光寺

新庄右近将監

歩兵寺

徳山出羽

伊豆村

矢口浩一弁

陸軍副総裁

高沢志摩

騎兵隊

島田徳之進

步兵隊

横田伴重

步兵隊

福王合之介

撤兵隊

福田八房右衛門

砲兵隊

天野新之丞

遠山修理

步兵隊

久留左京

松田之税

和田勝右衛門

加茂流流

林百彦

栗田彦八郎

小林端一

間宮常刀

撒兵改卷

堀 岩右衛門

真野弦吉

同宮秩三郎

明治二十二年夏

就



